

子育て環境の向上に資する公園の在り方

－「プレーパーク」から考える子どもの成長発達－

静岡県立大学 短期大学部 副島研究室

実施者：こども学科 准教授 副島里美

要 約

子どもの成長発達を促す観点から、静岡県内（5 か所）及び全国の代表的なプレーパーク（5 か所）でのインタビュー調査、及び静岡市内の公園（11 か所）の現地調査を行った。結果、①地域性（地域住民の意見など）を取り入れた公園、②子どもの成長発達を促す公園のデザイン、③親子が安らげる公園、の必要性が明らかになった。今後は、地域とともに作り上げる公園のあり方について検討していくとともに、子どもの成長発達に結び付く公園デザイン、そして子育て支援に結び付く公園のあり方についての検討が望まれる。

I. 研究の目的

子どもにとって、「遊び」は成長発達に欠かせないものである。子どもは遊びを通して環境に順応し、以下のような心身の発達を育んでいくと考えられる。

- ①友だちとの共同的、協同的そして応答的な営みを通して、仲間としての感覚に気付き、家庭以外（社会生活）における人間関係の基礎を培う。また、このような人間関係の中で共に喜びを共有したり、葛藤する気持ちを体験する。このような体験は、自分と異なった考えや価値観の存在を知ることにつながる。また、それらを調整する中で、自己中心的な考えから脱却し、我慢する心や他者に対しての思いやりの心が育成される。
- ②自然や地域環境をはじめ、様々な知識（文字・数量・地域性など）を発見し、学び、感動する心が生まれる。
- ③自然物や道具遊具などを駆使し、試行錯誤しながら物事を創造していく力が発達する。また、それらを個人、あるいは集団で作ったときの満足感・達成感を享受する。そして、集団力が育成されることで、異年齢児に対する憧れの心やいたわりの心（道徳心）が出現する。
- ④身体的な能力が向上する（筋力・持久力・瞬発力など）。

本来、「遊び」は自主的・自発的な活動である。こどもは、自分が「したい」「やりたい」と感じる遊びを見つけ出し、意欲的・継続的に“遊び込む”という経験の中で、自己を成長させていく。しかし、まだまだ知識が乏しく、自己解決能力にも欠けるこどもが、選択できる遊びは限られている。つまり、こどもは、自己能力としての行動範囲が限定的であり（自分の意志で行動できる範囲の少なさ、体験する遊びが周囲の環境で大きく変化する）、自己の経済的な面を持ち合わせていない（欲しいものを取捨選択し、自分で購入したり、体験することができない）、状態であることを理解しておかねばならない。

このような観点から、周囲の大人や地域行政の担当者は、これらのこどもの発達の状態を熟知し、多くの異なる経験ができる機会を提供していく義務がある。なぜならば、このような体験は、上に示したような、将来の生活能力や社会性になりうる重要な能力とつながっているからである。特に近年では、都市化や情報化の傾向が進む中で、「子どもの遊び場」が減少している。結果、ゲームなどのバーチャル的、固定化された世界の中に遊びを見出す子どもが増加している。

本来、遊びによるこどもの成長は、自然や地域の中で育まれるものである。この意味からも、地域住民に最も身近な「公園」は、子どもの成長発達に大きな意義を持つ。特に、多くの経験が積める「プレーパーク」は、子どもの成長発達に非常に有効であるとされている。しかし、近年は、①公園での事故が起こることへの警戒、②不審者に対する対策、などの視点が重要視されたことで、公園内の「禁止事項」は増加し、公園としての機能が有効活用されていない現状が見られる。このような現状は、こどもの意欲を低下させ、「遊びの場」としての公園の意義を希薄化させる恐れがある。

このような現状を鑑みて、本研究では「プレーパークの意義」に焦点をあて、プレーパークがどのような観点から子どもの成長発達を促しているかを提示することで、今後の公園の在り方を提示したい。具体的には以下のような内容を研究の目的とする。

1. 公園（特にプレーパーク）の理論的位置づけの整理
2. 「プレイパーク」が成立するための要因

II. 研究の方法

1. インタビュー調査

1) 対象者

静岡県内（5か所）、及び観点から活発な活動を行っていると思われるプレーパークの実施者に、インタビュー調査を行った。対象者は表1の通りである。

表1 インタビュー対象者一覧

	性別	年齢	拠点地	
A	女	61	静岡県静岡市	静岡県内
B	男	56	静岡県静岡市	
C	男	57	静岡県静岡市	
D	女	52	静岡県浜松市	
E	女	62	静岡県伊豆の国市	
F	男	59	東京都世田谷区	静岡県外
G	男	54	神奈川県横浜市	
H	男	56	神奈川県川崎市	
I	男	35	愛知県名古屋市	
J	男	73	兵庫県明石市	
	平均	56.5		

2) インタビューの方法と倫理

- ①依頼：電話での依頼、日程の調整後、正式な依頼書を郵送及びメール添付で送付した。
- ②インタビュー実施期間：2016年12月～2017年1月
- ③インタビューの場所：原則として活動の場所。ただし、天候等の関係で変更した場合もある。
- ④インタビューの方法：インタビューは半構造化面接とし、以下の項目を質問した。
 - ・実施の目的
 - ・活動の内容
 - ・実施によって感じる子どもの成長観
 - ・安全に対する配慮
 - ・保護者の反応
 - ・活動に対する課題
 - ・行政への希望

⑤インタビューに際しての倫理

インタビュアーと対象者が互いに誓約書を交わし、十分なインフォームドコンセントを行った。また、インタビュアーと対象者が1対1で、他者に聞こえない場（あるいは対象者が指定した場）で行うという形式を取った。実施時間は30分～1時間程度で、面接内容は研究対象者の了解を得てICレコーダーに録音した。

3) 分析の枠組みと手続き

本研究は仮説生成を目的としているため、その目的に照らし、インタビューデータをもとにボトムアップモデルを構築するのに適した木下¹⁾の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下M-GTAとする）を分析の枠組みとして採用した。

手続きでは以下の過程を行った。第1にICレコーダーの情報を文字として起こし、テキストを作成した。第2にテキストの分析テーマに関連する箇所に着目して類似した部分（カテゴリー）を具体例（ヴァリエーション）として集め、概念名を付けた。第3にそれぞれの概念から考えだされる内容を整理した。

2. 市内公園の現地調査

市内の11か所の公園を現地視察した。対象園は以下の通りである。

秋葉山公園	安倍川公園	今宮公園	小鹿公園
城北公園	陣笠山公園	清水月見公園	住吉公園
駿府城公園	日本平公園	森下公園	

III. 結果と考察

インタビューから以下の内容が明らかになった。

「プレーパーク」の特徴とそれに付随する子どもの成長発達

①「できる限り制限（禁止事項）のない空間」から育まれる自己肯定感

多くの対象者が語った事柄は、「公園が自分の居場所となる」ということである。現在多くの公園では「〇〇してはいけない」という禁止事項がある。プレーパークはそのような禁止事項がほとんどない。子どもたちが“自分のやりたいこと”を“自分で決められる”（自発性の原理）環境がそこにはある。このような環境が子どもに安心感を与え、内にあったモヤモヤやストレスを表出（壊すなどの行為）させる。しかし、一定期間後には安定した自己を取り戻し、自己肯定感や意欲につながっていくと考えられた²⁾。



図1 プレーパークにみられる看板



図2 静岡市内の公園で掲示されている禁止事項

②見守りの中から生まれる安心感

また、そのような子どもの“やりきれない心”を受け止めてくれる大人の存在の必要性が語られていた。子どもは大人をよく観察している。この人は信頼できる人か？この人は自分を受け止めてくれる人か？信頼関係がない大人に対しては、どのような人かを判断するために「試し行動」をする子どもも多い。プレーパークに常駐しているスタッフ（プレーリーダー）は、それらの子どもの気持ちを理解した上で、子どもたちの言動を受け止め、遊びを促したり、共に遊ぶ。そして、時には支援や見守りなどの関わりを、個々に応じて行っていた。

このような大人の関わりを子どもは欲している。公園に常駐し、子どもたちに対して意識外での導きを促すことができる「遊びの専門職スタッフ」の必要性を再認識した。

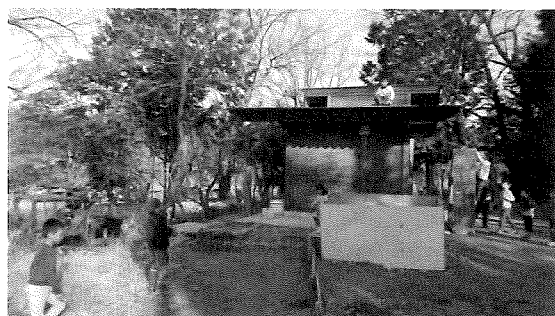


図4 大人の見守りの中での屋根のぼり



図5 大人の支援を受けて工具を使う

保護者の「落ち着ける場」としての役割

保護者の反応には二つの段階が見られた。第一の段階は、このような遊び場に対して嫌悪感を露わにする保護者である。このような保護者は、“たまたま通りかかり興味本位でのぞいてみた”場合など、プレーパークの経験が少ない保護者であった。このような保護者は、“汚れること（服などを汚すこと）”を非常に嫌がる。また、禁止の言葉も多い。天野³⁾が言う「遊びを表す三大形容詞、“あぶない”、“きたない”、“うるさい”という禁止の言葉が多くなる。つまり、「そんなことしたら危ないでしょ。やめなさい!」、「そんなことをしたら洋服が汚れちゃうからやめて!」、「大きな声を出したら周りのお友だちに迷惑だからやめなさい!」などである。そこにはもちろん“怪我をしたら大変”などの子どもを思う気持ちが主流である。しかし、一方では、“病院に行くことになったら大変だから”、“お洗濯が大変なの”、“苦情が来たらイヤ”などの気持ちも見え隠れしている。

一方、プレーパークに慣れている保護者は、「ここは子どもを叱らなくていいからありがたい」、「ここに来るとほっとする」などの考えを持っていた。つまり保護者も、“子どもを叱りたくない”、“子どもにもっと自由に遊ぶこと

ができる空間を与えたい”、などの考えを持っているのである。もちろんこのような保護者の考えの基盤には、「安心・安全な空間であるという信頼感」、「子どもが本当に楽しんでいるという実感」が必要である。このような子どもの姿があることで初めて、子どもの“あぶない”、“きたない”、“うるさい”という姿を保護者自身が受け入れることができるようになるのである。また、プレーパークの遊び道具（遊具や工具）には、発達に達していない子どもが制限されるような“しかけ”がある。つまり、個々の発達に応じた遊具工具でしか遊べない工夫がなされている。また、常にプレーリーダーの温かい見守りの体制が整っている。このような環境は、保護者にとっても「落ち着ける場所」という波及効果を生んでいたのである。

IV. 地域への提言

今回の研究の結果を鑑み、以下のような提言と展望を示したい。

1. 地域性を活かした公園の必要性

今回のインタビューでは、地域と一体になった公園の必要性が多く語られていた。そのためには、①地域住民の意図を組んでいること、②地域性が出ていること、③地域によって管理がされていること、などが必要となる。日本においても21世紀を境に、地域住民との話し合いの中で、公園を作り出す動きが増えている^{4) 5)}など。今回のG園も地域住民と子どもの意見の総意の中で生み出された公園である。このように、地域の住民の意見を取り入れた園では、近隣の住民からの苦情はほとんどないと語られた。また、管轄の市区と綿密な連携が取れている。静岡市においても、今後のより一層の地域住民との連携が必要であると感じた。

2. 子どもの成長発達を第一義的に考えた公園のデザインの検討

乳幼児の成長発達は、生活や遊びを通して行われる。それゆえに子どもの遊び場である公園は、子どもの成長発達に大きな意味を持つ。今回、市内の公園を視察したが、一部の公園を除き、その利用率は非常に低かった。公園の中には巨大遊具も設置されているところが数か所ある。このような巨大遊具は維持管理に多額の費用を要する。また、広場であってもボール遊びを禁止する公園、野花を摘むことを禁止されている掲示も見られ、疑問を感じた。これらの公園は、晴天の昼間にも関わらず、子どもの姿がほとんどなかった。今後は、子どもたちが自主自発的に遊ぶことができる遊具のあり方などについても、検討していくべきではないだろうか。

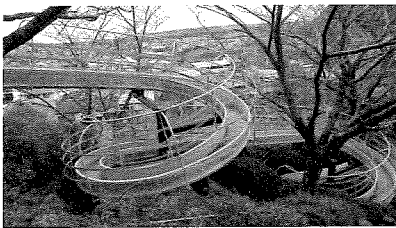


図6 巨大すべり台



図7図8 使用者（子ども）がいない広場

3. 親子が安らげる公園を目指して

現代の子育て世代は、親自身がいわゆる“ゲーム世代”であり、戸外で思い切り遊んだ経験が少ないことが予想される。このような保護者に、“戸外（公園）の魅力”を訴えても心に響かない。まずは、親子を対象にした、“戸外での遊び方”を伝授すること、そして“戸外遊びの楽しさ”を伝えることが必要である。また、保護者が安心できる公園であるためには、遊びの専門家（プレーリーダーなど）が常駐している公園が、市内に一か所でもあることが必要ではないだろうか。そのような環境（物や人）が存在することで、保護者は心から身をゆだね、安心した子育て環境を体感できると考える。

引用文献・参考文献

1. 木下康仁 (2003) グラウンディッド・セオリー・アプローチの実践 弘文堂
2. 渡辺弥生 (2013) 子どもの「10歳の壁」とは何か？乗りこえるための発達心理学 光文社新書
3. 天野秀昭 (2016) よみがえる子どもの輝く笑顔 すばる舎
4. 加賀谷真由美 (2001) 子どもとつくる遊び場とまち—遊び心がキーワード 萌文社
5. 小野佐和子 (1999) こんな公園がほしい—住民がつくる公共空間 築地書館